

提示資料の有無による日本語意見文の比較

－台湾人上級学習者を対象に－

楊 明翰 堀田 智子 菅谷 奈津恵

要 旨

アカデミック・ライティングでは資料を適切に引用するスキルが重要である。本稿では、作文指導への示唆を得ることを目的として、台湾人上級学習者に、資料を読んで書くタイプ（Reading-to-write：RW）と資料無しで書くタイプ（Writing-only：WO）の意見文作成を課し、課題への取り組みと産出文章の文章構造、引用の特徴を検討した。分析の結果、提示資料の有無によらず、同様の文章構造だった。RWの引用については、学習者によってつまりき箇所やその程度は異なっていた。本結果は、与えられた課題の正確な理解、取り組み方法といったタスク表象の構築を支援する必要性を示唆している。

【キーワード：技能統合型ライティング / タスク表象 / 文章構造 / 引用 / 譲歩】

1. はじめに

日本語の授業で一般的な作文課題の一つに、意見文がある。意見文の作成は、根拠をあげ筋道立てて述べる必要があるという点で、レポートや論文などのアカデミックな文章作成の基礎的スキルを養うことが期待できる。先行研究では、意見文の文章構造、特に、主張・意見の位置（二通2001; Lee 2006; 伊集院・高橋2012; 石黒2017）や、譲歩の使用（梶本1997; 伊集院・横田2010; 工藤・伊集院2013）が注目されている。

日本語学習者の意見文の研究は、ほとんどが資料を用いずに行われたものであるが、西（2021）では資料を読んで書くタイプ（Reading-to-write：RW）と資料無しで書くタイプ（Writing-only：WO）の課題を実施している。西は2名の中国語母語話者を対象に、発話思考法を用いて産出過程を検討した。RWでは読解と作文の過程を区別するために、資料を読解後に回収した。分析の結果、課題全体にかかった時間は2名ともRWがWOより長く、特に執筆前の計画が長くなっていた。この傾向は日本語能力が低い学習者に顕著で、執筆前の計画はWOの5分15秒に対し、RWでは18分15秒であった。RWでは執筆前の計画時点で読解資料が回収されていたが、西は資料の影響がこの段階でも続いた可能性を指摘している。資料の情報をヒントに構想を広げたり、過剰にアイデアが拡散してしまったりした可能性があるという。

だが、西（2021）はRWとWOを異なるテーマで実施しており、両者の違いが資料の有無によるものか、テーマによるものかは不明である。また、このRWがアカデミック・ライティングの引用を想定したものとは考えにくい。前述のように、意見文の執筆時には読解時の用紙が回

収されており、読解メモなども参照することができなかった。レポートや論文の引用で資料や読解メモが確認できないという状況は、一般的だと考えられない。RWの教示でも、資料を読むよりの指示はあったが、それを意見文にどう使うのかは指示がなく、出典表示が必須だとはされていなかった。

英語学習者10名を対象としたPlakans (2008) では、テーマと資料の有無のカウンターバランスをとってRWとWOが実施されている。RWでは資料の回収を行わず、意見文作成中に資料を参照することが可能であった。資料の情報を自分の文章に取り込み、出典を示すよりの教示も行われていた。分析の結果、ライティング経験の豊かな学習者はRWでWOよりも書く前の準備に長く時間を使っていた。資料と深く関わり、立場を決めるのに時間をかけたという。一方、アカデミック・ライティングの経験が少ない学習者は、RWとWOの準備時間が同程度であった。

Plakans (2010) は、Plakans (2008) のデータを再分析し、学習者が課題をどのように認識して取り組むかというタスク表象 (task representation) の観点から検討を行った。その結果、アカデミック・ライティングの経験が少ない学習者は、RWとWOを同様にとらえ、資料をアイデアの生成として使用するにとどまったと指摘している。より経験のある学習者は、RWでは資料を組み込むことが求められていると考えて、どこでどう使うかを考えるのに時間を割いたという。

適切に引用を行うことは、アカデミック・ライティングで重要なスキルである。日本語の授業で引用能力の養成を目的にRW意見文作成を課す場合、どのような点に留意が必要だろうか。本研究では日本語学習者にRW／WO意見文の作成を課し、課題への取り組みと産出された文章の特徴とを検討し、作文指導への示唆を得ることを目的とする。

2. 研究方法

2.1 調査概要

調査協力者は、東北地方の大学に交換留学をしていた台湾人学習者の丹宇、思芳、美恵、新一の4名である(名前は仮名)。調査時点において、留学期間は4名とも半年であった。日本語学習歴は丹宇が4年8ヶ月、他の3名は6年であった。全員が母国では日本語を主専攻とする4年生で、日本語能力試験N1に合格している上級レベルの学習者である。母国ではいずれも作文授業を受講し、意見文を作成した経験がある。

調査は4名の留学先の大学で、第一著者が3日間にわたり個別に実施した。1日目、2日目の調査では「エスカレーターの片側を空けたほうがいいか」(以下、「エスカレーター」)、「化粧をしたほうがいいか」(以下、「化粧」)をテーマに賛否を述べる意見文を書いてもらった。学習者は、テーマの一方をWOで、他方をRWで意見文を作成した。テーマとタイプ(WO／RW)、作成順はカウンターバランスをとった。3日目には、日本語学習歴等を尋ねるフェイスシートと、調査データの使用方法等に関する同意書に記入してもらった後に、約1時間の半構造化インタビュー

を行った。

インタビューでは、フェイスシートの記載内容の詳細や意見文を作成した感想を中国語で質問した。執筆意図を確認するために、WO/RWのそれぞれで自分が一番言いたいことを示す文に線を引くことも求めた。RWでは意見文で資料を使用した部分と、資料の対応部分に線を引いてもらい、引用意図を尋ねた。

2.2 WO、RWの実施手順と材料

WO、RWでは、まず教示文の書かれたシートや作文用紙等の材料を配布した。口頭での指示には中国語を用いたが、WO、RWの材料は日本語で表記した。

次に、執筆前の準備として、15分を目安に教示文を読んで、シートの空白を利用して下書きをするよう指示した。RWではこの際に提示資料の読解もするように伝えた。15分が経過した時点で、下書きを参考にしながら意見文を書くように教示した。ただし、執筆開始までの時間には明確な制限を設けなかったため、後述のように準備にかけた時間は様々である。また、執筆については制限時間を2時間とし、書き始めた時刻と終了の時刻を作文用紙の所定の欄に記入するよう求めた。執筆中に辞書を使用することを認め、800字程度で指定用紙に手書きしてもらった。RWでは提示資料を適宜参照してよい旨も伝えた。

各テーマのWOで使用した教示文を以下に示す。教示文の作成にあたっては、伊集院（2011）、Plakans & Gebiril（2012）を参考にした。RWでは下記に続けて「また、次の資料を適切に文章に取り込み、情報源を明示してください。」との指示を加えた。

【化粧】

ある人は「女性の化粧はマナーだから、したほうがいい」と言います。一方、「化粧よりも内面のほうが重要だから、しなくていい」と言う人もいます。あなたはどの立場¹に立ちますか。理由をつけて、あなたの意見を書いてください。

【エスカレーター】

ある人は「エスカレーターを歩く人のために、片側を空けたほうがいい」と言います。一方、「安全のため、片側を空けないほうがいい」と言う人もいます。あなたはどの立場に立ちますか。理由をつけて、あなたの意見を書いてください。

RWでは各テーマに対して賛成、反対と立場の異なる新聞の投書文を、それぞれ資料A、資料Bとして提示した。投書文の末尾には書誌情報を記した。投書文を用いたのは、字数が少なく、学習者になじみのある内容のものが収集しやすいと考えたからである。

4つの投書文の原文には字数や文章の難易度にばらつきがあった。そこで、全投書文が同程度となるように改変した。改変後の読解資料の難易度は、表1の通りである。文章難易度は、日本

表1 読解資料の文字数・文章難易度・語彙難易度

テーマ	化粧品		エスカレーター	
	A	B	A	B
資料				
文字数	317	310	315	318
文章難易度	3.04	3.03	3.1	3.05
語彙難易度 (N2以下)	93%	93.5%	93.5%	90.3%

語文章難易度判別システム (<http://jreadability.net/>) で測定した結果、中級後半にあたる3.03～3.1となった。語彙の難易度はリーディングチュウ太 (<https://chuta.cegloc.tsukuba.ac.jp/>) で判定した結果、N2 (中上級レベル相当) 以下が9割以上である。N1 (上級レベル) および級外と判定された語は、資料に中国語訳の注を付した。

2.3 意見文の分析方法

産出文章の分析手順は、基本的に伊集院・高橋 (2012) に倣った。まず、手書きされた文章を原文通りに文字入力し、文番号と段落番号をふった。次に、表2のように、文機能の判定を行った。文機能の定義は、伊集院の一連の研究を参考にした。「主張」「根拠」「背景」「補足」は、伊集院・

表2 文機能の定義と実例

文機能	定義	例
主張	テーマ (事物) に対して、「賛成」または「反対」を表す部分。	[新一 WO] 文12 まとめると、やはりいろいろな原因から見れば、片側を空けないほうがいいと私が思っている。
根拠	なぜ主張が成立するか／成立しないかを説明する部分、主張の成立に関わる具体的な理由を示す部分。	[思芳 WO] 文15 もう一つは、化粧品はお金がものすごくかかることである。
背景	主張に関連する歴史的背景や社会的、個人的状況を説明する部分。	[丹宇 RW] 文01 エスカレーターはどこにもある施設として、鉄道運輸の発達する日本では大事に見られる。
譲歩	筆者が文章中で自説と対立する立場に理解や有利な情報を示したりする部分、および自説の問題点、限界を指摘したり、自説に不利な情報を提示する部分。	[美恵 WO] 文14 たしかに、エスカレーターを歩くことは普通より危ないかもしれないが、もし十分注意するなら、大丈夫だと思う。
反論	譲歩 (自説に対立する立場) に対して、言い返す部分。	[美恵 WO] 文14 たしかに、エスカレーターを歩くことは普通より危ないかもしれないが、もし十分注意するなら、大丈夫だと思う。
補足	主張の直後に、これまでの論調とは別の角度から主張に関して補足的に言及する部分、私的または感情的な見解を示す部分。	[新一 WO] 文13 実は私も習慣でよく間違っているから、皆がそのルールをやめるまで、また長い時間があり、もっといろいろな方法を試したほうがいいのかもしい。
問題提起	文章の導入部に「その文章で何が問題になっているか」を設定する部分。	[丹宇 WO] 文03 まず、「女性は化粧品したほうがいい？」という命題は、共通利益にかがらなければ成り立つことができない。
メタ的言及	「文章の展開を理解しやすくするような機能を持つ」部分。	[思芳 RW] 文05 その理由は二つある。
提言	別の観点からの主張または提案を表している部分。	[新一 RW] 文18 その価値観こそ、これから考えなければいけない課題であると思う。

盧 (2015) による。「問題提起」は石黒 (2008) に、「メタ的言及」は田中・阿部 (2014) による。「譲歩」は、工藤・伊集院 (2013) による。「文12」等の表記は、文番号を示す。判定は第一著者と第二著者が行い、判断が分かれた場合は協議のうえ判定を確定させた。なお、表2及び後出する例は、学習者の原文のまま記載する。

3. 結果

3.1 課題への取り組み

本節では、各学習者がどのように課題に取り組んだかを、課題に要した時間や下書き、インタビューの回答をもとに報告する。

WO、RWの所要時間は、表3の通りである。丹宇、思芳、美恵は、両課題の合計時間が同程度で、準備時間、執筆時間においても差が10分以内にとどまった。一方、新一は執筆前の準備、執筆ともにRWのほうが長く、合計時間は134分となった。

丹宇は準備時間がWO15分、RW17分と短かったが、どちらも下書きを全くしなかった。丹宇によれば、普段から文章を書く際に下書きをしないとのことだった。頭の中で整理して、書きながら考えると述べていた。

他の3名は、書き方や分量は様々だが、下書きを作成した。下書きで使われた言語は全て日本語であった。思芳と美恵は、単語や短い文を自由な配置で書いており、メモに近い。新一の下書きには、より詳細で、用紙の左側に①、②のように段落番号と思われる数字が書かれており、最終的な意見文にほぼ対応する形で構想をしていた。

このように、違いはあるが、3名の下書きで共通するのは、テーマに対する自分の立場とその理由が下書きに明示されていたことである。例えば、思芳はWOでは教示文の「化粧よりも内面のほうが重要だから、しなくていい」に波線を引いていた。RWでは自分が書いた「エスカレーターは片側を空けてほしい」という文を枠で囲い、自分の立場であることを示した。主張の理由と思われる語（例「化粧品 お金かかる」）も下書きに記していた。3名は、意見文で自分の立場を根拠とともに示す必要があることを、準備段階で明確に意識していたことがわかる。

さらに、RWの場合は提示資料を意見文に取り込み、出典を明示するよう求められていた。思芳のRWの下書きには「主張 A」とあった。これとは少し離れた部分に「ちょっとした時間差

表3 意見文の作成時間(分)

タイプ： テーマ	丹宇		思芳		美恵		新一	
	WO： 化粧	RW： エスカ	WO： 化粧	RW： エスカ	WO： エスカ	RW： 化粧	WO： エスカ	RW： 化粧
準備時間	15	17	22	14	17	25	29	41
執筆時間	88	81	57	59	86	77	76	93
計	103	98	79	73	103	102	105	134

で」など資料と同じ表現が見られ、資料 A を引用しようと考えたことがうかがえる。美恵の下書きに書かれた3つの単語「バイト」「面接」「清潔感」は、化粧の資料 A に使われた語であったが、出典情報は記されていない。新一の RW には「②資料 B による、～」「③確かに、資料 A により、～」と、段落番号に続けて出典が明記され、資料のどの情報を使う予定かがはっきり示されていた。

インタビューでは、全員が提示資料でわからないところはなかったと答えた。2つの意見文の書きやすさについては、新一がそれぞれに長所、短所があり同じぐらいだと答えたのに対し、他の3人は「化粧」を選んだ。思芳と美恵は「化粧」について自論があり、立場の決定に迷わなかったようである。丹宇は、「エスカレーター」は論点が思い浮かばなかったが、「化粧」は書くべき論点があったため書きやすかったと述べた。4名が感じた書きやすさの比較では、資料の有無よりもテーマによる影響が大きかったと考えられる。

意見文に取り組んだ際に感じたことを尋ねると、丹宇はこの課題は台湾の入試問題のようだと述べた。RW では資料を読んだ後に当初の立場を考え直し、選択に迷ったと述べた。提示資料は一般的な状況ではなく個別的な事例を挙げたものだったため、こじつけがあると感じたという。意見を裏付けるための根拠として論理性に欠けていることが、迷いにつながったようである。ただし、資料からヒントを得ることができるため、文章作成は速くなったとも述べた。実際に丹宇の執筆時間は、WO の88分に対して RW は81分と短くなっていた。

丹宇と同じテーマで RW に取り組んだ思芳からも、立場の選択に迷ったとの報告がされた。しかし、その理由は丹宇と異なり、2つの資料の説明にはどちらも一理あると感じたためだとのことだった。さらに、資料のどの部分を使って自分の論点を支えるかにも迷ったと報告していた。資料ありの長所として、文章中の表現を学んだことに加え、他者の考えを知ることができることにも触れた。WO については「文章が主観的にならないかを心配していた。自分だけがそう考えているが、他者はそう思っていないかもしれない」と述べた。

美恵は、RW で資料を使用する際に迷ったことは特にないと答えていた。執筆時に困難を感じたのは、自分の立場を示すために理由を3つ挙げたかったが、2つしか思いつけなかったことだと報告した。だが、美恵が理由を考えることが難しく感じたのは RW だけではなく、WO でも主張に関わる理由の列挙が一番難しかったと述べていた。教示文には「資料を適切に文章に取り込」むようにとあったが、これにはあまり注意が向かなかったと見え、「参考資料にただで、中の内容を使うつもりはなかった」と述べた。美恵は他の3名に比べ、RW に資料を活用しようとする意識が弱かったようである。

RW に最も長く取り組んだ新一は、資料の要約後に、自分の文章に違和感のないようにどう組み込むかに苦心したという。また、丹宇と同様に、資料の使いにくさも指摘した。資料の論点は論の展開に組み込みにくく、作文課題は「化粧はマナーだから、したほうがいい」に対して、資料には「化粧しないことが間違っていることや化粧すべきだ」といった記述がなかったからだと説明している。執筆の準備が長かったのは、意見文の構想に時間を要したのだと推測される。新

一はWOの準備も他の学習者より長かった。WOでは自分と反対意見を出す際に、それを支える理由がなかなか思いつかなかったと述べた。

以上、両タイプの課題に要した時間と下書き、インタビューの分析から、4名の課題の取り組みにはそれぞれの特徴が見られた。共通していたのは、全員が読解の難しさを感じていなかったこと、主張を支える根拠を考えて取り組んでいたことである。

3.2 産出文章の検討

以下では、学習者が産出文章を検討し、学習者が課題の教示にどのように対応したかを検討する。まず、全体的な課題の達成度を確認した後、RW、WOの文章構造を比較し、RWにおける引用を検討する。

3.2.1 課題の達成度

表4に示すように、RW、WOの字数は概ね800字程度という教示文に沿うものであった。WOが767～828字（平均795.3）、RWが709～937字（平均797.0）と、RWのほうがばらつきが大きい。RWの総時間が134分と長い新一は、字数も937字と最も多かった。

教示文では、意見文に含める内容として、化粧、エスカレーターに関して自分の立場をその理由とともに示すことを求めている。本研究では、文機能を判定する際に、立場を示す文を「主張」に、理由を「根拠」に分類している（表2）。後述のように、丹宇のWOでは「主張」が明示されておらず、教示文とは異なる観点から意見を提示してその理由を述べていた。そこで、丹宇の「根拠」は△とした。他の3名の意見文には「主張」と「根拠」が明示されており、課題の要求に応えたとみなせる。

RWでは、資料を意見文に取り込んで出典を記すことも求めている。インタビューで使用が報告された資料は、丹宇と新一がABの両方、思芳がAのみ、美恵はBのみであった。思芳と新一は、出典を明示しながら引用していたが、丹宇と美恵のRWにはどこでどの資料を用いたの

表4 課題の達成

	丹宇		思芳		美恵		新一	
	WO： 化粧	RW： エスカ	WO： 化粧	RW： エスカ	WO： エスカ	RW： 化粧	WO： エスカ	RW： 化粧
字数	828	709	784	759	767	783	802	937
意見文の立場（主張）	不明	賛成	反対	賛成	賛成	賛成	反対	反対
理由（根拠）	△	○	○	○	○	○	○	○
使用した資料	A（賛成）	○	/	○	/	/	/	○
	B（反対）	/	○	/	/	○	/	○
出典表記	/	×	/	○	/	×	/	○

かが明示されていなかった。

3.2.2 文章構造の比較

表5は、文機能の分析結果を示したものである。1文に機能が2つある場合は、丹宇のWOの文01「背景+提言」のように、両方を記した。網掛けは主張の文である。「根拠」と「譲歩」は、その内容によって「根拠1」「根拠2」のように番号を付して分類した。□は資料を使用したと学習者がインタビューで報告した箇所である。■は改行がされた箇所で、▲はインタビュー時に美恵が行った段落分けの開始部分である。段落の区切りには罫線を入れた。

表5 文機能の分析結果

文	丹宇		思芳		美恵		新一	
	WO: 化粧	RW: エスカ	WO: 化粧	RW: エスカ	WO: エスカ	RW: 化粧	WO: エスカ	RW: 化粧
1	■背景+提言	■背景	■背景	■背景	■主張	■背景	■背景+主張	■背景
2	メタ	背景	背景	背景	メタ	主張	■メタ	主張
3	■問題提起	メタ	背景	背景	▲根拠1	背景	根拠1	■根拠1
4	根拠1	■根拠1	背景	■主張	根拠1	背景	根拠2	根拠1
5	背景	□根拠1	メタ	■メタ	根拠1	背景	■譲歩1	根拠1
6	■根拠1	根拠2	背景	根拠1	根拠1	背景	譲歩1	■譲歩1
7	反論 ²	■譲歩1	背景	根拠1	根拠1	背景	■根拠3	□譲歩1
8	反論	譲歩1	背景	根拠1	根拠2	■メタ	根拠3	■反論
9	■反論	譲歩1	■主張	根拠1	根拠2	根拠1	根拠3	反論
10	根拠2	■提言	■メタ	根拠1	根拠2	根拠1	■根拠3	反論
11	根拠2	提言	根拠1	根拠1	根拠2	根拠1	根拠3	反論
12	■根拠2	■メタ	根拠1	根拠2	根拠2	根拠1	■主張	反論
13	根拠2	■根拠3	譲歩1+反論	譲歩1	根拠3	根拠1	補足	■譲歩2
14	根拠2	根拠3	根拠1	□反論	譲歩1+反論	根拠2		譲歩2
15	根拠2	根拠4	根拠2	根拠2	根拠3	根拠2		譲歩2+反論
16	根拠2	根拠4	根拠2	■主張	根拠3	根拠2		■主張
17	■提言	■根拠5	根拠2	提言	根拠3	根拠2		譲歩3
18	提言	補足	根拠2	■主張	根拠3	根拠2		提言
19	補足	■主張	■提言		▲根拠3	根拠2		
20		補足	■主張		根拠3	□譲歩1+反論		
21					根拠3	反論		
22					根拠3	根拠2		
23					根拠3	■主張		
24					▲主張			

表5のように、美恵はWOが1段落、RWが2段落とほとんど改行がなかったため、インタビュー時に段落分けをするならどう区切るかを尋ねた。その結果、WOを4段落に分けたが、RWはまとめて該当するのが最後の一文だけなので、2段落のままだと答えた。WOを1段落で書いた理由を尋ねたところ、一気に書いてしまいたくて段落分けについてあまり考えていなかったとのことだった。

他の3名もWOとRWで同様の段落分けをしていた。思芳はどちらも3段落で、新一は6段落であった。丹宇はWOが6段落、RWが8段落と、段落を細かく分ける傾向が見られた。

主張の出現位置については、思芳と新一はWOとRWとも、第一段落と最終段落に書いていた。美恵も両課題で同様で、WOは文1と最後の文に、RWは文2と最後の文に主張があった。一方、丹宇は、RWで最終段落に主張を置いたが、WOでは主張に該当する文がなかった。例1は丹宇のWOである。提言が書かれているが、賛成／反対を示すわけではなく、「化粧する人に委ねる」という意見である。インタビューで丹宇が一番言いたいこととして線を引いたのは、最終文にあたる文19だった。丹宇自身はWOにおいても、RWと同様に、最終段落で主張を述べようとしたのだと思われる。

例1 [丹宇 WO]

文17 ということで、そもそも「マナーですから」とは理由にならなくて、誰でもかってに他人の判断を干渉する権利を持っていないのである。 【提言】

文18 ただし、個人的にけしているんなメリットとデメリットを考えて適当に判断する必要がある。 【提言】

文19 「化粧しなくてもいい」とは「してはならない」ではないので、どう選ぶかも問題になるかもしれない。 【補足】

「譲歩」は教示文では言及していないが、丹宇のWO以外の意見文すべてに出現していた。例2は、美恵のRWである。美恵は、「化粧をしたほうがいい」という意見に賛成の立場であるが、文20前半では自分の主張と対立する立場を部分的に認めた後に、文20後半と文21で反論している。「たしかに～が・・・」と一文に譲歩と反論を述べる文型は、前掲表2の例に挙げた美恵のWO文14でも使用されていた。

例2 [美恵 RW]

文20 たしかに、化粧しなくても輝いていた女性がいますが、それは少くないだろう。

【譲歩1 + 反論】

文21 やはり、自分の肌に自信がない女性あるいは年齢に負けるおばさんが多い。 【反論】

以上、RWとWOの段落分けや主張の位置、譲歩の使用等から、4名は2つの課題で同様の

書き方をした、または同様の書き方をしようとしていたと言える。

3.2.3 RWにおける資料の使用

表5のように、資料を用いたとして4名が線を引いたのは計7文あった。丹宇の2文はいずれも、例3のように出典表記がなく、一見資料を用いたとはわからないものだった。下線部は本人が引用部分として線を引いた箇所である。文5とここに使用したという例3'の下線部とを比較すると、両者が直接対応しているわけではないことがわかる。資料のその後の部分も含めて自分の解釈を交えながら書いたのだと思われる。

例3 [丹宇 RW]

文05 ラッシュ時には片側空いていけば通過時間の縮めるを通して同じ時間帯により多く人を
運輸せらるることができる。 【根拠】

例3' [資料 A]

エスカレーターを歩く慣習を禁止したら、ラッシュ時にはホームなどは人でいっぱいだろう。 乗り継ぎ時に、ちょっとした時間差で目的の列車に乗れないこともある。片側空けは、よい慣習として許されるよう希望する。

思芳と美恵の引用文は、1文ずつにとどまった。例4のように著者年方式で出典を明記した思芳は、作成途中に資料の使用を思い出したと報告していた。思芳には引用文として報告した箇所以外でも、資料の表現を使用した部分が確認された。例5は「ちょっとした時間差で」「乗り継ぎ」等、前掲の例3' [資料 A] と同一の表現が多く見られた。

例4 [思芳 RW]

文14 しかし、峰岸 (2015) の指摘したとおり、エスカレーターを並んで立ってベルトをつか
まないままで話している人こそ危ない。 【反論】

例5 [思芳 RW]

文03 一方、もしエスカレーターを歩くのを禁止したら、ちょっとした時間差で乗り継ぎの列
車や重要な会議に間に合わないことがある。 【背景】

美恵が引用箇所として報告したのは、前掲の例2で挙げた文20の前半部分である。「化粧しなくても輝いていた」という表現は、化粧の資料Bの見出しだが、丹宇同様に出版表記がなく、引用符も使われていなかった。インタビューで美恵は、資料を使うことを忘れており、文章の後半で思い出して書いたと述べていた。

RW 課題に長く時間をかけた新一は、引用文数も3と最も多い。教示文の指示に着実に従い、

例6のようにRWの前半から資料を用いて出典表記を行っていた。文3では投書文の一部（「化粧しなくても十分戦える」）を、引用符を用いて適切に引用している。だが、記事の種類は読み取れなかったようで、投書をインタビュー記事だと勘違いして記していた。また、文6の「先輩」とは、資料では投書文の著者とともに結婚式場でアルバイトをしている先輩を指すが、新一の書き方では読み手に「結婚した先輩」との誤解を招きかねない。

例6 [新一 RW]

文03 『朝日新聞』が「化粧しなくても輝いていた女性」についてのインタビューによると、化粧していない女性も笑顔で人と接し、「化粧しなくても十分戦える」と上司に認められたそうだ。 【根拠】

文06 確かに、『朝日新聞』のもう一つ「化粧と責任」についての記事により、化粧していない女性は結婚式で化粧した先輩に感動して、化粧をしはじめる件もあるそうだ。

【譲歩1】

4. 考察

以上、RWとWOの段落分けや主張の位置、根拠、譲歩の使用等から見ると、4名は2つの課題で同様の書き方をした、あるいは同様の書き方をしようとしていたことが確認された。主張の位置については、インタビューの回答から、それまでに受けた日本語や中国語での指導が影響したと考えられる。第一段落と最終段落（美恵は最終文）に主張を書いた3名（思芳、美恵、新一）は、日本語の授業でこうした書き方を推奨されたと答えていた。最終段落のみに主張を置いた丹宇は、台湾の大学入試の作文試験と同様に、中国語の論説文の書き方（背景説明→賛成の立場→反対の立場→まとめ）で作成したと述べた。

RWでの資料の用い方には、学習者ごとの違いが見られた。思芳と新一が適切に出典表記をしていたのに対し、丹宇と美恵は本人の報告がなければどこに資料を用いたのかわからない書き方がされていた。両者は「資料を適切に文章に取り込み、情報源を明示してください」という教示を、十分理解していなかったと考えられる。

丹宇は台湾の作文授業で資料を参考にして意見文を書く課題に取り組んだが、その際に引用表記は求められなかったという。本稿のRWも同様にとらえ、資料の内容や表現があればよいと考えていた可能性が高い。

美恵は、提示資料は参考にしただけだと述べ、下書きにも出典情報なしで資料と同じ語を3つ書いただけであった。情報源を明示する場合にはどう書くかをインタビューで尋ねると、文章の最後に「参考資料と資料B」と書くと言った。美恵には積極的に資料を用いようという意識はうかがえず、文中でどのように出典を示せばいいかという知識もなかったのだと思われる。

思芳は出典表記を適切にしておき、教示文の理解はできていたと考えられる。しかし、RWの執筆中に資料の使用を失念しており、引用文が1つにとどまった。同様のことは、Plakans (2008)

でも報告されている。Plakans (2008) での一部の調査対象者は、資料の読解後に課題の指示を忘れてしまい、教示文を繰り返し読んでいたという。これは、第二言語での読解・作文に認知資源が割かれるため、教示内容を記憶に保持することが困難なためだと考えられる。また、思芳の下書きは、資料 A の使用計画を示すものだったが、意見文のどこにどう用いるかまでは読み取れないものであった。下書きが認知的負荷を補うものとはなっていなかったのではないだろうか。

資料を取り込むという教示に最も忠実で、適切なタスク表象を有していたと考えられるのは、新一である。新一は資料をどう使用するかを熟考し、2つの資料を意見文で使用した。しかし、新一の引用には、不適切な言い換えが見られた。新一も含め4名から読解に対する困難は報告されなかったが、本人らが気づかないだけで実際には読み取りに問題が生じていた可能性がある。

以上の結果から、日本語の授業で RW 意見文を実施する際の留意点として、以下が示唆される。まず、学習者の課題の理解度を確認しながら、丁寧に指示を説明する必要がある。Plakans & Liao (2018) では、教師が口頭で教示文を読み上げながら、各指示で何が求められており、どう取り組みばよいのかという考えを口頭で表出してみせる例が挙げられている。つまり発話思考法と同様のことをしてみせるということである。指示を理解しやすくするために、学習者の母語が同じ場合には教示文に母語を用いることも方法の一つであろう。

次に、下書きについても、指導が必要だと考えられる。本研究の RW には、下書きと産出文章の引用とに関連が見られた。美恵、思芳は下書きに出典や引用内容を明確に記すことで、より適切な引用が可能となったかもしれない。下書きを全くしなかった丹宇には、RW での引用の問題に加えて、WO の主張が不明瞭であるという問題も見られた。特に、第二言語で意見文を作成する場合は、読解や文章作成の認知的負荷を軽減するためにも、どのように下書きをするかが重要ではないだろうか。

5. まとめと今後の課題

本稿では台湾人上級学習者を対象に、RW / WO の2つのタイプの意見文作成を課して、課題への取り組みと産出文章の文章構造、引用の特徴を検討した。分析の結果、提示資料の有無によらず、段落分けや主張の位置、譲歩等、文章構造全体としては同様の書き方がされていることがわかった。

RW の引用については、出典の未表記（丹宇、美恵）といった基本的なものから、資料を使用するという指示の失念（美恵、思芳）、言い換えの不適切さ（新一）まで、学習者によってさまざま箇所は異なっていた。これには引用の能力だけでなく、教示文の理解自体が影響していた可能性もある。RW を引用能力の養成につなげるためには、まず、その課題に何が要求されており、どう取り組みばよいのかというタスク表象の構築を支援する必要があるだろう。

以上の結果から、意見文作成課題を行う際に教師が考慮すべき点があった。しかし、今回の調査対象者は4名と少なく、探索的なものにとどまるものである。意見文は一般的に中級段階で導入される課題であることから、今後は中級学習者を対象にした検証も行う必要がある。

参考文献

- 石黒圭 (2008)『日本語の文章理解過程における予測の型と機能』ひつじ書房
- 石黒圭 (2017)「日本語学習者の作文における文章構成と説得力の関係」『一橋大学国際教育センター紀要』8, pp.3-14. 一橋大学国際教育センター
- 伊集院郁子・横田淳子 (2010)「『JLC 日本語スタンダード』に基づいた中級段階における文章表現指導の試み—『意見文』の指導を中心に—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』36, pp.85-100. 東京外国語大学留学生日本語教育センター
- 伊集院郁子 (2011)『日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベース』http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ijuin/koukai_data1.html (2020年12月12日参照)
- 伊集院郁子・高橋圭子 (2012)「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文の構造的特徴—『主張』に着目して—」『日本語・日本語学研究』2, pp.1-16. 東京外国語大学国際日本研究センター
- 伊集院郁子・盧姪鉉 (2015)「日韓の意見文に見られるタイトルと文章構造の特徴—日本語母語話者と韓国語母語話者と韓国人日本語学習者の比較—」『社会言語科学』18 (1), pp.141-167. 社会言語科学会
- 工藤嘉名子・伊集院郁子 (2013)「超級学習者の意見文における「譲歩」の論理性」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』39, pp.1-15. 東京外国語大学留学生日本語教育センター
- 根本総子 (1997)「意見文の構造—中・上級学習者作文における問題点—」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』創刊号, pp.79-92. 大阪大学留学生センター
- 田中真理・阿部新 (2014)『Good Writing へのパスポート—読み手と構成を意識した日本語ライティング』くろしお出版
- 西菜穂子 (2021)「技能統合型作文タスクにおける L2作文産出過程—思考発話法による事例研究」『神田外語大学紀要』33, pp.215-236. 神田外語大学
- 二通信子 (2001)「アカデミック・ライティング教育の課題—日本人学生及び日本語学習者の意見文の文章構造の分析から—」『北海学園大学学園論集』110, pp.61-77. 北海学園大学学術研究会
- Lee 風子 (2006)「留学生の書く日本語意見文の分析—日本人学生との比較において—」『立命館法学 別冊ことばとそのひろがり』4, pp.399-412. 立命館大学法学会
- Plakans, L. (2008) Comparing composing processes in writing-only and reading-to-write test tasks. *Assessing Writing*, 13(2), pp.111-129.
- Plakans, L. (2010) Independent vs. integrated writing tasks: A comparison of task representation. *Tesol Quarterly*, 44(1), pp.185-194.
- Plakans, L. and Gebriel, A. (2012) A close investigation into source use in integrated second language writing tasks. *Assessing Writing*, 17(1), pp.18-34.
- Plakans, L. and Liao, J. T. (2018) Task representation. *The TESOL Encyclopedia of English Language Teaching*, pp.1-6.

投書文の出典

- 峰岸純夫「(声 どう思いますか) よい慣習として許容してほしい」『朝日新聞』2015年10月28日朝刊, 14頁
- 曾根貴良「(声) エスカレーター片側空けに疑問」『朝日新聞』2015年9月27日朝刊, 10頁
- 須谷美月「(声) 化粧、責任・祝福・敬意も表す」『朝日新聞』2017年7月31日朝刊, 8頁
- 宮本光男「(声 どう思いますか) 化粧しなくても輝いていた女性」『朝日新聞』2017年3月22日朝刊, 16頁
- 朝日新聞社に無断で上記の投書文を転載することを禁じる (承諾番号: 23-0538)。

付記

本研究は JSPS 科研費 JP18K00705 の助成を受けたものである。調査に協力してくださった留学生のみなさんに感謝いたします。調査材料の準備においては、東北大学国際文化研究科応用言語研究論講座修了生の小山内早織さんにご協力いただきました。また、同講座「応用言語研究特別講義」の受講生のみなさんには、草稿の内容を検討していただきました。ここに記して謝意を表します。

注

- 1 「どの立場」という表現には不自然さが認められるが、本稿では原文のまま記載する。
- 2 丹宇の WO はどちらかの立場に立って述べるものではなかったため、自説と反対の立場を示す「譲歩」に該当するものはなかった。しかし、文7:9は文6で述べたことに反対を示す内容が続いていた。言い返すという点で共通しているため、これを「反論」に分類した。

(楊明翰 東北大学大学院国際文化研究科応用言語研究講座)
(堀田智子 東北大学大学院国際文化研究科 GSICS フェロー)
(菅谷奈津恵 東北大学高度教養教育・学生支援機構 教授)